

琉球大学学術リポジトリ

アフリカ大陸にかかわる地図表記の課題 — 地理教育の視点から高校世界史教科書を検討する —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-18 キーワード (Ja): 世界史教科書の地図, アフリカ大陸, 地理認識 キーワード (En): 作成者: 西岡, 尚也, Nishioka, Naoya メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/993

アフリカ大陸にかかわる地図表記の課題

—地理教育の視点から高校世界史教科書を検討する—

西岡尚也

The problems of maps on African Continent

—The examination of the senior high school world history textbooks
from the view point of the geography education—

Naoya NISHIOKA

I. はじめに

1. 地理教育の衰退

長年高校で世界史を教えて来たベテラン教員から「地理が必修であった時代には世界史が教えやすかった…」という声をよく聞くが、これは当然である。学習者の世界認識（空間認識＝地理認識¹⁾）の形成が不十分のまま、歴史認識を強引に押しつけようとしても「消化不良」になってしまうのである。

このような例は世界史に限らず、他教科・他分野でもみられる。わが国では学習指導要領改訂のたびに、地理分野は軽視され、学校教育（小・中・高）における地理教育は衰退・低迷している（西岡1996、1999）。地理を学ぶ生徒は確実に減少しているのである（斉藤1998）。

筆者の経験で過去約20年間をふり返っても、高校では1982年4月の新教科「現代社会」の登場で、従来の「地理」に代わり1学年で現代社会を必修とするケースが定着した。その後1994年4月から「社会科」は消滅し、公民科と地理歴史科に分裂・解体された²⁾。地理歴史科といえば、地理分野と歴史分野が対等に扱われていると思われがちだが、実際は世界史のみが必修となり地理は選択科目へ格下げとなった。

この結果当然であるが、公立高校における地理

教員の採用は深刻な影響を受け、多くの都道府県で「地理教員採用なし」が続いている³⁾。学習者（生徒）側から見れば、地理をきちんと学ぶ機会と権利が奪われているのである。このような状況は、従来地理が果たしてきた「世界認識（空間認識＝地理認識）の形成」＝「世界地図にふれる機会」を著しく激減させた。

2. 世界史の「役割」が変化

現在、多くの高校生が「世界認識（空間認識＝地理認識）」を、どの小教科で「形成」するかを考えた場合、必修となった世界史が第一にあげられる。その理由は教科書の記述を含め「世界地図にふれる機会」は、地理を除く他の公民科・地理歴史科の小教科では、世界史が圧倒的に多いからである。

地理を学ばず地図帳の世界地図や地球儀に一度も接することなく、高校を卒業するケースが増加している。この結果、高校における世界史の「役割」＝「守備範囲」は大きく変化し、地理の授業数減少によって「世界認識（空間認識）の育成」＝地理分野にまで拡大したのである。

* 琉球大学教育学部 社会科教育教室

表1：世界史A 10冊（A1～A10）、検討した教科書の一覧（2003年度供給分）

番号	発行所	著 作 者	書 名	記 号	検定済年
A1	東京書籍	加藤 晴康 ほか	世界史A -歴史と現代-	世A602	1998年
A2	実教出版	中村 義 ほか	世界史A 新訂版	世A603	1998年
A3	三省堂	増谷 英樹 ほか	明解世界史A 改訂版	世A567	1997年
A4	清水書院	城戸 一夫 ほか	新世界史A 改訂版	世A568	1997年
A5	帝国書院	岡崎 勝世 ほか	明解世界史A 初訂版	世A604	1998年
A6	山川出版	江上 波夫 ほか	要説世界史 改訂版	世A605	1998年
A7	山川出版	柴田三千雄 ほか	現代の世界史 改訂版	世A569	1997年
A8	一橋出版	二谷 貞夫 ほか	世界史A 新訂版	世A570	1997年
A9	第一学習社	永井 滋郎 ほか	高等学校改訂版 世界史A	世A606	1998年
A10	桐原書店	斉藤 孝 ほか	新世界史A	世A607	1998年

出典：文部科学省HP「高等学校用教科書目録-第2部-地理歴史」により作成。

II. 世界史教科書における「地図表記」の検討

このような高校での地理教育軽視の方向を考えると、世界史教科書の内容を「地理教育の視点」から検討・分析することの意義は大きいといえる。とりわけ「地図表現」においては、一層慎重な記述がされるべきであろう。

本稿ではバランスのとれた「正しい世界認識」の必要性から、世界史教科書の中でも記述分量の少ないアフリカ大陸に、焦点を当てて考察を試みた。この根底には、従来わが国で軽視されてきた第三世界地域に対する視点を「反省」しなければならないという筆者の意味が込められている（西岡1997、2001）。

なお本稿で用いた「アフリカ」の範囲は、欧米の研究者に多い、サハラ砂漠以南の中南アフリカ（ブラックアフリカ）に限定せず、北アフリカ（地中海世界＝ホワイトアフリカ）を含み大陸全体の意味で使用する。北アフリカ（ホワイトアフリカ）と中南アフリカ（ブラックアフリカ）は、アジアの日本から見た場合、歴史・地理的にまとまった「アフリカ大陸」を形成していると考えられる方が自然であるからである⁴⁾。

表1、表2は本稿で検討した高校世界史教科書（2003年度供給分28冊）で、これらは2003年4月現在、高校2年生以上で使用されているものであ

る。表1には世界史A（全10冊）、表2には世界史B（全18冊）を示し、以下本文・図中の出典表示では便宜上記号A1～10およびB1～18を用いて表記した。例えばA1-13は、表1中の「教科書A1の13ページ」を表すこととする。

1. エジプトと周辺に関わる地図表記

(1) ナセル湖とスエズ運河に関して

図1はほとんどの教科書に登場する「古代オリエント世界」（B14-14）である。この地図では古代メソポタミアからエジプト、現在の西アジアから東地中海を表している。けれども地図をよく見るとナイル川にはナセル湖⁵⁾、スエズ地峡にはスエズ運河⁶⁾が描かれている。

ナセル湖とスエズ運河はどちらも古代オリエント（図1）時代には存在してはいけな。ナセル湖（ハイ・ダム湖）は20世紀後半にできた人造湖であり、それ以前の地図に描かれるのは問題である。

もし仮に、ナセル湖誕生のきっかけとなるアスワンハイダム（1970年完成）が、古代エジプトに存在したなら、毎年定期的な「ナイル川の洪水」は起こらず、エジプト文明そのものがなかったかも知れない。

ナセル湖に関しては図1（B14-14）の他にも、B12-15、B13-16、B15-19に同様な誤りがみられる。またスエズ運河の建設以前の表記はA1-

表2：世界史B 18冊（B1～B18）、検討した教科書の一覧（2003年度供給分）

番号	発行所	著 作 者	書 名	記 号	検定済年
B1	東京書籍	尾形 勇 ほか	世界史B	世B571	1997年
B2	東京書籍	中村 英勝 ほか	新選世界史B	世B572	1997年
B3	実教出版	鶴見 尚弘 ほか	高校世界史B 新訂版	世B608	1998年
B4	実教出版	鶴見 尚弘 ほか	世界史B 新訂版	世B573	1997年
B5	三省堂	荒井 信一 ほか	詳解世界史B 改訂版	世B609	1998年
B6	三省堂	栗原 純 ほか	三省堂世界史B	世B610	1998年
B7	三省堂	西川 正雄 ほか	世界史B 初訂版	世B574	1997年
B8	清水書院	奥 保喜 ほか	新世界史B 改訂版	世B611	1998年
B9	清水書院	池田 温 ほか	要解世界史B	世B612	1998年
B10	清水書院	池田 温 ほか	詳解世界史B	世B547	1994年
B11	帝国書院	川北 稔 ほか	新編高等世界史B 最新版	世B613	1998年
B12	山川出版	江上 波夫 ほか	高校世界史 改訂版	世B614	1998年
B13	山川出版	柴田三千雄 ほか	新世界史 改訂版	世B615	1998年
B14	山川出版	江上 波夫 ほか	詳説世界史 改訂版	世B575	1997年
B15	山川出版	神田 信夫 ほか	世界の歴史 改訂版	世B576	1997年
B16	第一学習社	越智 武臣 ほか	高等学校改訂版精選世界史B	世B617	1998年
B17	第一学習社	向山 宏 ほか	高等学校改訂版新世界史B	世B577	1997年
B18	第一学習社	谷川 道雄 ほか	高等学校世界史B	世B551	1997年

出典：文部科学省HP「高等学校用教科書目録－第2部－地理歴史」により作成。

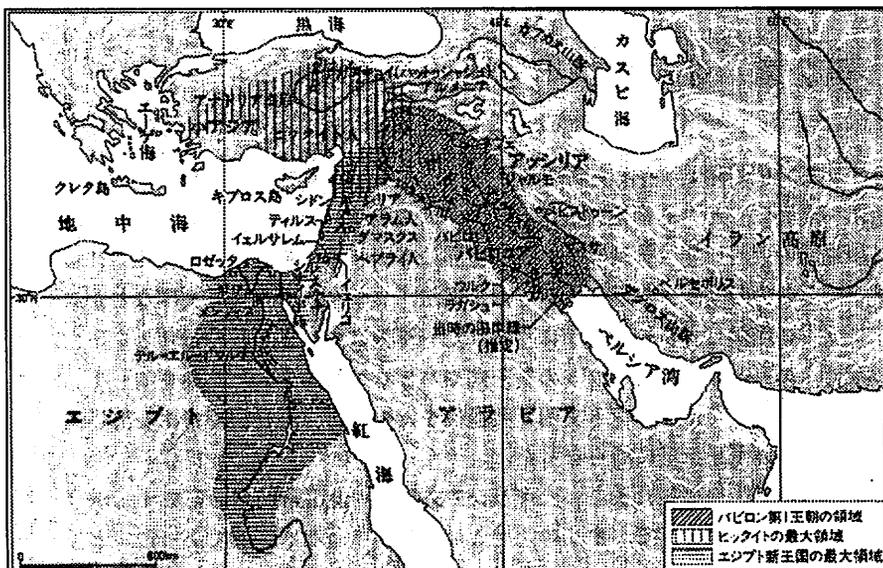


図1：古代オリエント世界、出典（B14-14）

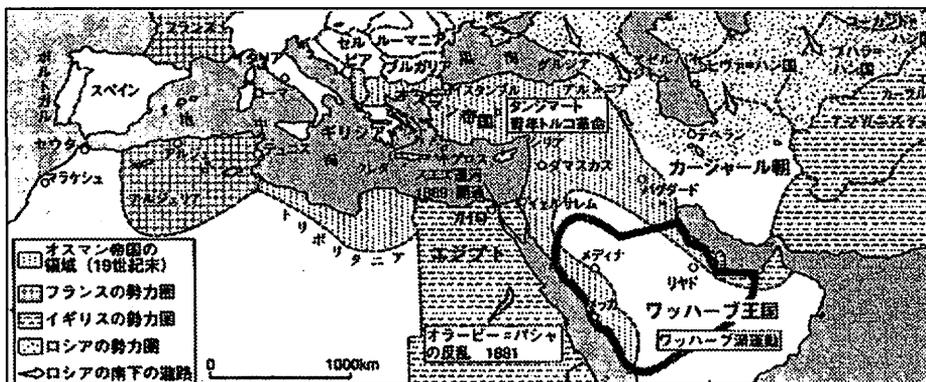


図2：各地の民族運動と改革（19世紀）、出典（B11-271）

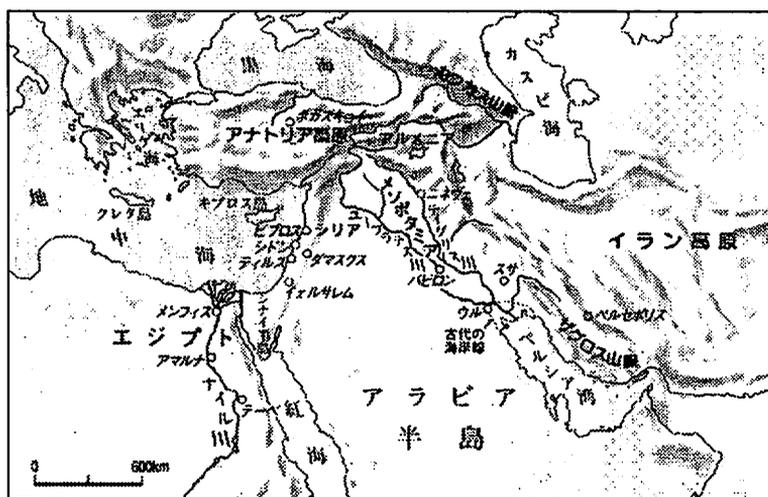


図3：西アジア世界、出典（A10-33）

53・54、A10-33、B5-35、B12-20、B13-21・38、B14-21・35、B15-21・35にもみられる。時代は異なるが図2「各地の民族運動と改革（19世紀）」（B11-271）にもナセル湖が描かれている。

図3「西アジア世界」（A10-33）は、図1とほぼ同じ範囲を描いているがタイトルが異なる。このタイトル「西アジア世界」は中近東（もしくはオリент）の地域的概念とほとんど一致する。けれども中近東がしばしば含むことのあるスエズ地峡以西のアフリカは含まない⁷⁾。したがってエジプトを含んだ図3のタイトルとしては正確でない。

(2) 紅海とつながるナイル川

ナイル川に関してはもう一つ大きな問題がある。図4「4世紀前半ころのキリスト教徒の分布」（B12-38）のナイル川河口をよくみると、三角洲（デルタ）の分流1本が紅海に流れ出している。ナイル川は地中海に流出し巨大なデルタを形成するが、紅海には流れ出していない。

現在このルートには、イスマイリア運河があり、これによってナイル川とスエズ運河が結ばれているが、このイスマイリア運河が完成するのはスエズ運河と同時代である⁸⁾。

したがってナイル川デルタの分流が紅海に流出したことはないが、仮に図4がイスマイリア運河の水路を表しているとしても、スエズ運河建設（1860年代）以前を描いた地図にこのルートを表

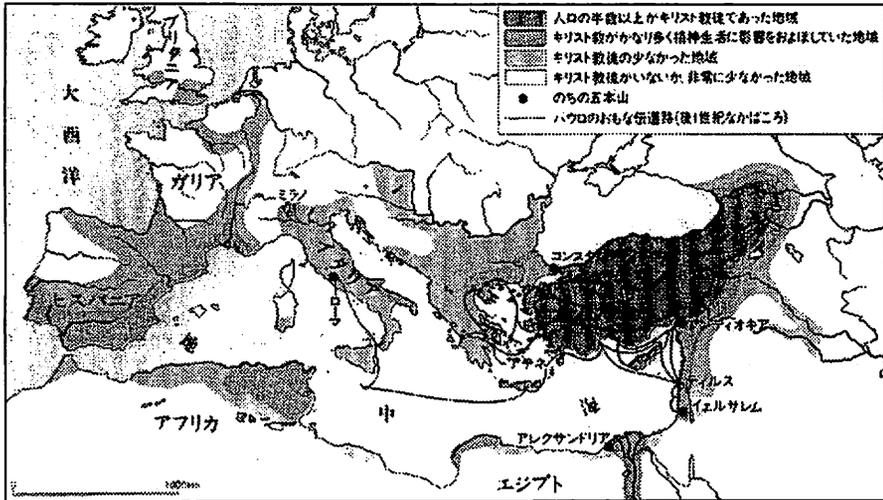


図4：4世紀前半ころのキリスト教徒の分布、出典（B12-38）

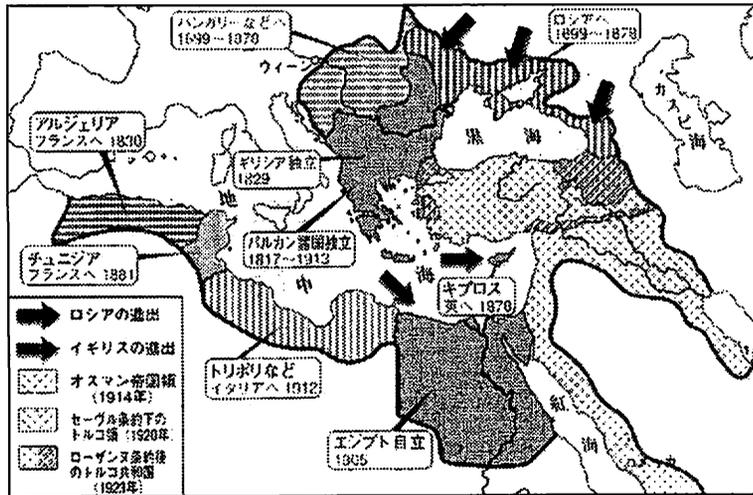


図5：オスマントルコ帝国の解体と新生トルコ共和国、出典（A10-147）

記することは誤りである。

ナイル川が紅海に流出する誤りは図4（B12-38）以外にも、B10-20、B12-23・122・124・186・280、B13-24・102・226、B14-23・128・130・312、B15-25・27・39・129・131・191にみられる。同じ出版社に重なるのは、おそらく同一の図版（原稿）より作成された地図を点検せず安易に用いたためと考えられる。

他にもナイル川では、図5「オスマン帝国の解体と新生トルコ共和国」（A10-147）に、デルタの一部が着色がされず無色（＝海と同じ）で表示

されるミスもみられる。

2. 河川に関する地図表記

アフリカ大陸の河川流路は、他大陸と比較して複雑である。水系（流域）を描いた図6でわかるように「内陸流域＝内陸河川」の存在が、この大陸の河川流路をより一層複雑にしている。高校世界史教科書に登場する地図はいずれも大陸図レベルの「小縮尺図」であり、細部にわたって厳密な「表記」を要求されるものでない。しかしながら小縮尺図であっても、やはりそのレベルで最低限

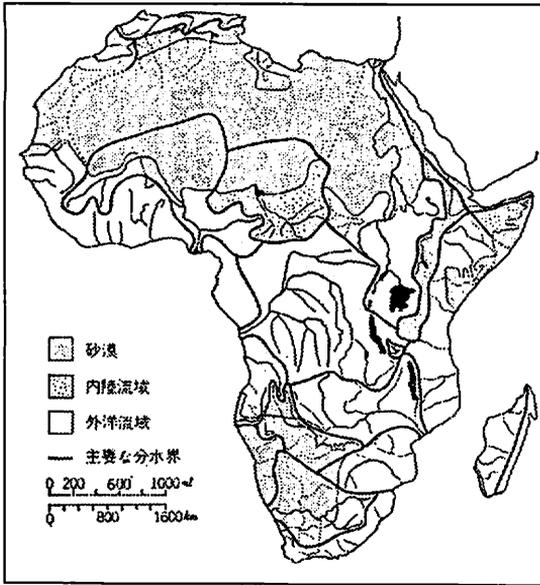


図6：マルトヌによるアフリカ水系概念図、
出典：小堀巖編（1971）『世界地誌ゼミ
ナールV、アフリカ』大明堂p.6

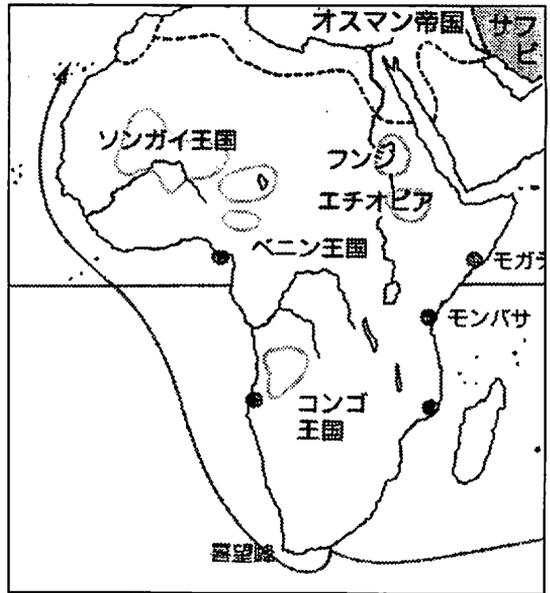


図7：16世紀の世界、出典（A4-77）

の正確さが必要となる。

(1) ニジェール川に関して

ニジェール川はナイル川、コンゴ（ザイル）川に次ぐ、長さではアフリカ大陸第3位の大河である。西アフリカのギニア共和国に水源をもち、サハラ砂漠南縁サヘル地帯を東に流れ、古くから周辺地域住民の生活を支えてきたアフリカを代表する大河であり、国際河川である。この流域には歴史的にガーナ、ソングイ、マリなどの国々が栄えた。その中心都市トンプクトーは「黄金の都」とも呼ばれ、大いに繁栄した歴史を持っている⁹⁾。

図7「16世紀の世界」（A4-77）に描かれたニジェール川は「逆流」し、その河口はナイジェリア（ギニア湾）でなくシエラレオネ付近から大西洋に流れ出している。河口のナイジェリアやその上流のニジェールの国名が、この大河の名称に由来する¹⁰⁾ことから、これは大きな問題である。図7（A4-77）以外にも、A2-50・52、A4-79・80、A10-71・75に同じ誤りがみられる。

この川の流路（流れる方向）はヨーロッパ人の中で疑問となり、18世紀末から19世紀中期にかけて、マンゴパーク（1771～1806年）、ルネカイエ

（1799～1838年）、ハインリッヒバルト（1821～1865年）などの「探検＝（ヨーロッパ人の視点からの）」が実施された¹¹⁾。

この結果19世紀中頃にはヨーロッパでは流路問題に「決着」がついた¹²⁾。にもかかわらず21世紀の日本の教科書ではまだ「誤解」されているのである。ニジェール川はこのような歴史を持った「大河」であるだけに、教科書に単純なミスが存在するのは本当に残念である。

(3) ザンベジ川の表記

図8「ガーナ王国とソングイ王国」（A7-16）に描かれたザンベジ川の表記にも問題がある。上流に別の河川（流域）であるクバンゴ川を付け足している。クバンゴ川はアンゴラ中西部に水源を持ち、ナミビアとの国境を東流してボツワナのオカバンゴ湿地に流れ込む内陸河川である。

このザンベジ川はリビングストン（1813～1873年）による「探検＝（ヨーロッパ人の視点からの）」が行われ、少なくとも流路問題に関しては19世紀末には、ヨーロッパでは「決着」がついている¹³⁾。ザンベジ川については、図8（A7-16）以外にも、A6-133、A10-57、B16-80、B17-107

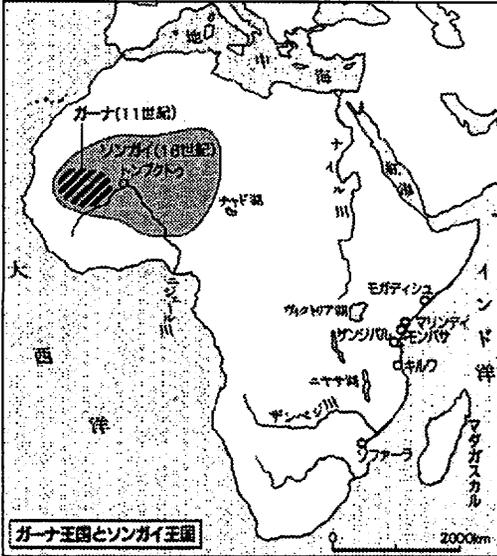


図8：ガーナ王国とソングイ王国、出典 (A7-16)

に同様な誤りがみられる。さらにA 6-133、A 7-16とA:10-57のアフリカ大陸にはコンゴ（ザイル）川がまったく描かれていない。

(4) リンボポ川・クネネ川の表記

再び図8「ガーナ王国とソングイ王国」(A 7-16)をみると、ザンベジ川の南にほぼ並行してリンボポ川が描かれている。この流路も正確ではない。上流部でソノブワジ（ナミビアに水源を持ち、カラハリ砂漠を流れてボツワナと南アフリカ共和国の国境を通り、オレンジ川に注ぐ）を付け足したため、実際より流路が長くなっている。ワジとは乾燥地域の涸れ川で一時的な降雨によって生じる砂漠の河谷をいう¹⁴⁾。このリンボポ川の表記に関わる同様な誤りは、A 6-133、A10-57にもみられる。

図9「氷河時代の地球」(B 2-3)にはクネネ川の表記に問題がある。クネネ川はアンゴラ南西部モコ山(2610m)付近を水源として、南流しナミビアとの国境を西に向かい大西洋に注ぐ河川である。図9では上流に内陸河川であるクバンゴ川（前述の図8ではザンベジ川上流と混同）を付け足し、ボツワナのオカバンゴ湿地からクネネ川が流れ出すように描いている。クネネ川に関わる同じ誤りは、A 8-105「アフリカの分割（20世

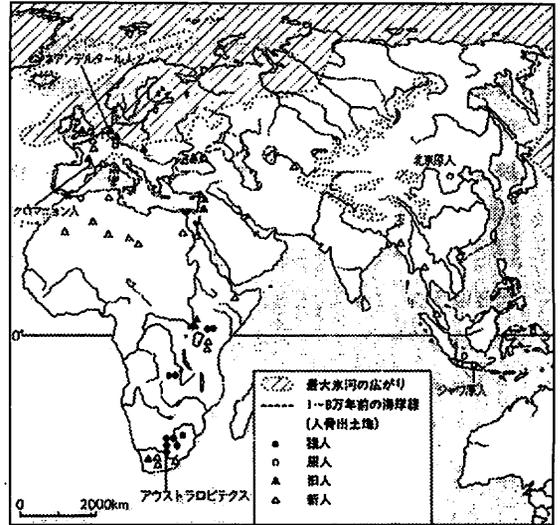


図9：氷河時代の地球、出典 (B2-3)

紀初頭)」にもみられる。

なおアフリカ大陸とは直接関係ないが図9に関しては「最大氷河の広がり」の表記にも課題がある¹⁵⁾。

3. 人口移動「奴隷貿易」にかかわる表記

図10「世界の人口移動（17～19世紀）」(A 3-97)では、アフリカ大陸からはギニア湾岸に「黒人」が記載され、カリブ海・西インド諸島および南アメリカ大陸に「矢印」で結ばれている。矢印はヨーロッパ、インド、中国からも出ているが「白人」「インド人」「中国人」の表記はない。アフリカ大陸にのみ「黒人」の表記があるのは、他と比較しても黒人を「意識的」「誇張的」ととらえた表現になっている。実際の「黒人」の人々の分布・居住範囲は図11のように、中南アフリカの広範囲である。したがって図10は誤った分布・居住範囲を表記している点からも、正しいとはいえない。また奴隷貿易のルートも多数のパターンがあり、詳細にみれば行き先もアメリカ大陸だけではなかった(図12)。

ギニア湾岸の人々がアメリカ大陸に「強制移動」「奴隷貿易」で運ばれたのは事実であるが、図10のある97ページには「奴隷貿易」に関する説明がない¹⁶⁾。しかもこのページの本文には「…19世紀

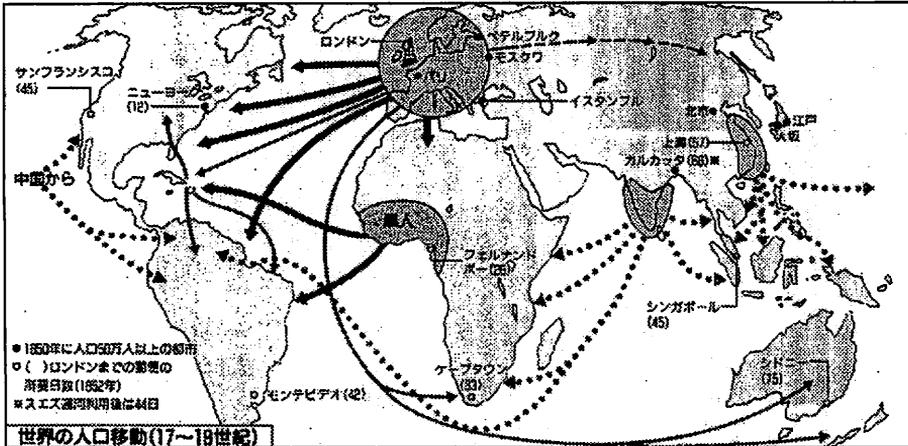


図10：世界の人口移動（17～19世紀）、出典（A3-97）

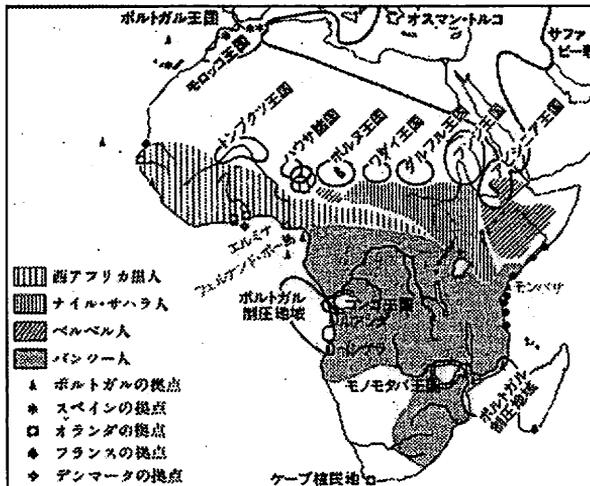


図11：1660年のアフリカ、出典：米山俊直（1985）『NHK市民大
 学講座・新アフリカ学』NHK出版p.77より引用。

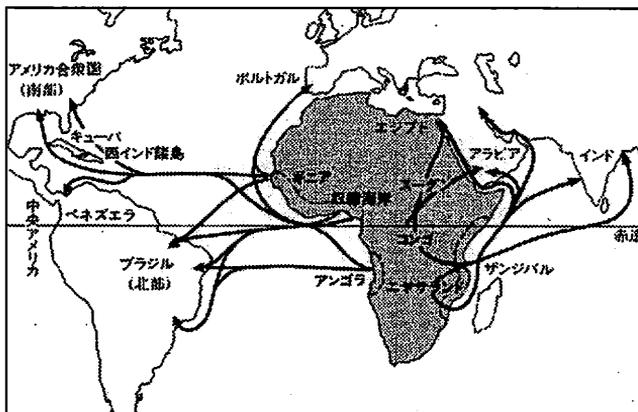


図12：奴隷貿易のルート、出典：米山俊直（1985）『NHK市民大学講
 座・新アフリカ学』NHK出版p.80より引用。

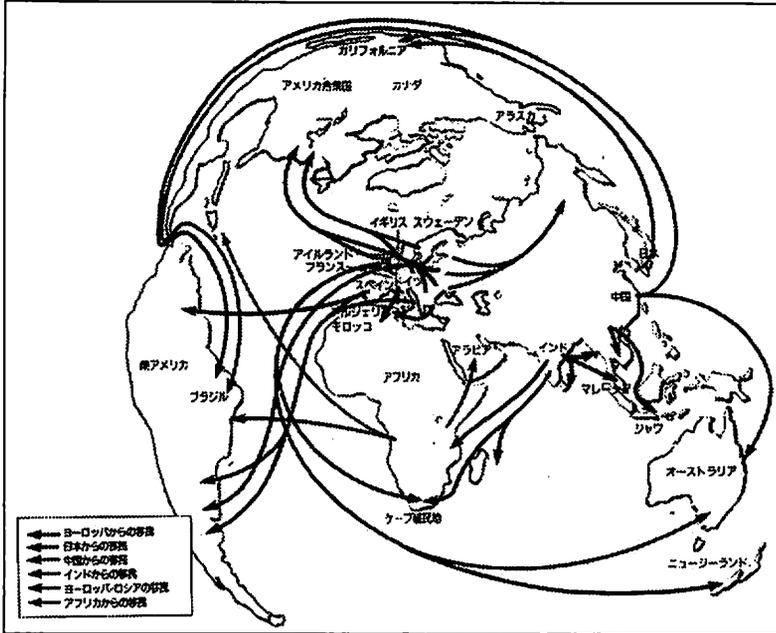


図13：世界の一体化と人口移動、出典：(B17-表紙うら)

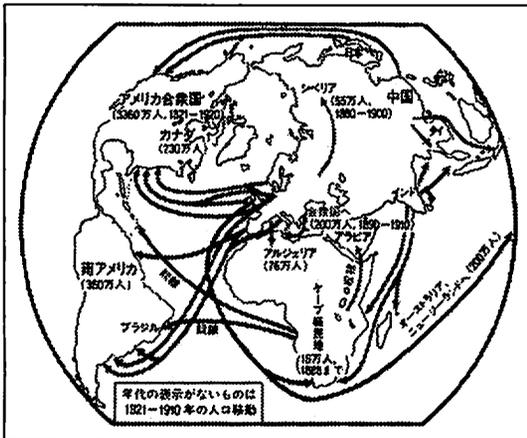


図14：世界の人口移動、出典：(A1-104)

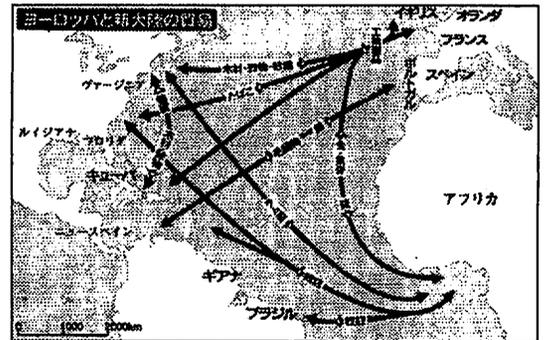


図15：ヨーロッパと新大陸の貿易、出典：(B7-173)

のヨーロッパでは、人口が急激に増加した。人々は、夢をいだいて新天地であるアメリカ合衆国やブラジル・アルゼンチンなどにわたった。…」とある。このようなヨーロッパからの「人口移動」の記載があるのに比べてアフリカの人々に関わる記載がないのである。

したがってこのページを読み、この図10を見た高校生は、アフリカ大陸の人々「黒人」も「夢をいだいて新天地」へ移動した、と誤解する危険性が大きい。これと同様な例は図13「世界の一体化

と人口移動」(B17-表紙うら)にもみられる。

少なくとも図10や図13には、「アフリカ大陸からアメリカ大陸への矢印は、奴隷貿易による強制的な移動である」という最小限の説明が不可欠である。

同じ奴隷貿易のルートを表示した、図14「世界の人口移動」(A1-104)では、さらに南のケープ植民地から矢印が出ている。図14(A1-104)とほぼ同じ表記のものには、A2-95、B1-261、B11-257がある。これらはいずれも図10と

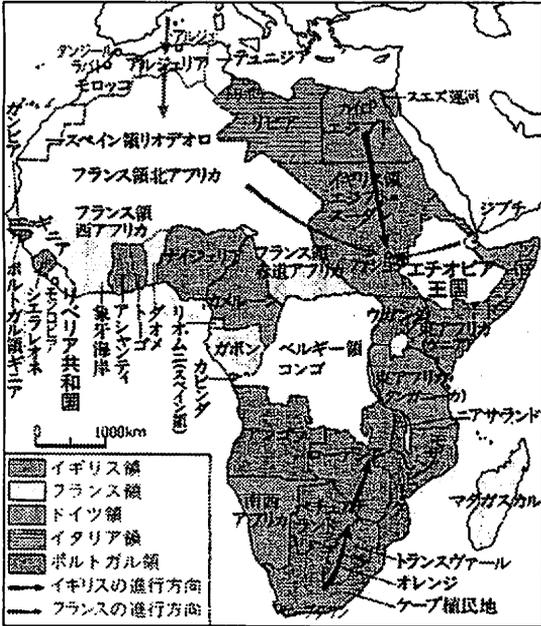


図16：20世紀はじめのアフリカ、出典（A2-114）

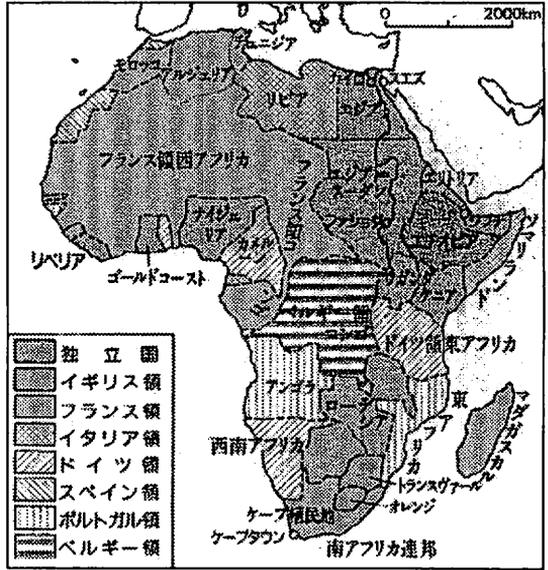


図17：アフリカにおける列強の植民地（20世紀初め）
出典：（A6-135）

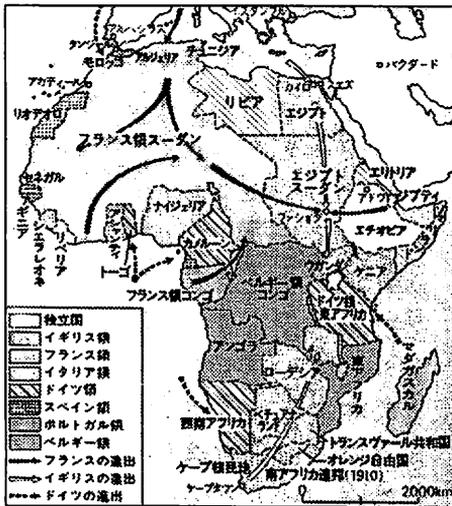


図18：帝国主義諸国によるアフリカ分割
（20世紀初頭）出典：（B1-271）

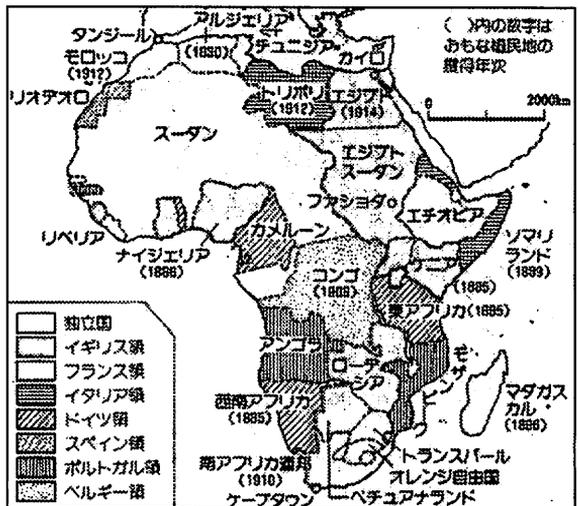


図19：列強のアフリカ分割、出典：（A4-135）

比較して、矢印のスタート地点がアフリカ南部（アンゴラやナミビアの大西洋岸）にあって、大きく表示が異なる。ギニア湾岸からスタートする矢印の表記（図11）も加えるべきである。

さらに奴隷貿易を表示した図15「ヨーロッパと新大陸の貿易」（B7-173）では、奴隷に関わる矢印が、新大陸（アメリカ大陸）とアフリカ大陸

の双方に向かっていて「混乱」が生じる原因をつくっている。矢印の方向はアメリカ大陸一方に表記すべきである。

4. 地名に関わる課題

(1) 植民地表記にみる「スーダン」の検討

図16（A2-114）、図17（A6-135）、図18

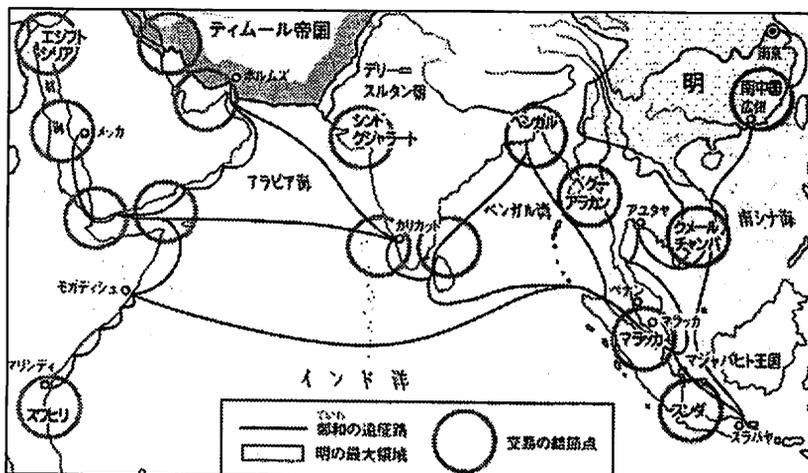


図24：東南アジア海洋世界、出典：(A5-111)

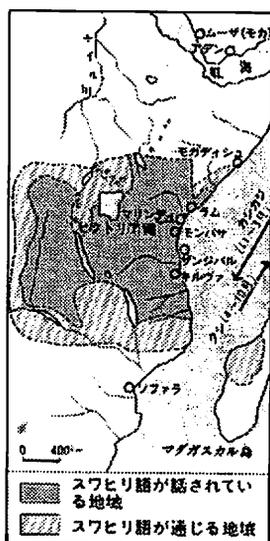


図25：スワヒリ文化、出典：(A8-56)

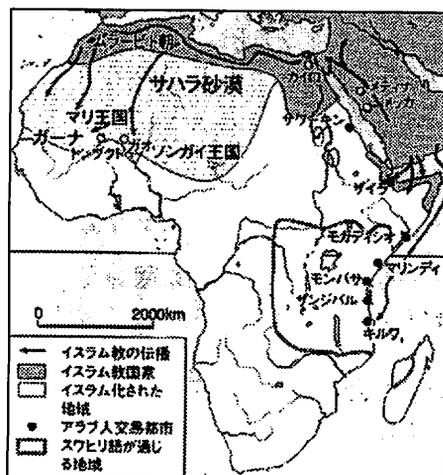


図26：東西アフリカのイスラム文化、出典：(B11-110)

エジプトスーダン、図23ではスーダンの表記になっている。図19のスーダンと図23のスーダンは、同じ名称で全く異なる地方を表示していることになる。一体どちらが「正しいスーダン」なのかと考えてしまう。

結論からいうとどちらもスーダンで正しい。地名辞書¹⁷⁾によれば、「スーダン地方はアフリカ大陸中北部の広大な境界不明瞭な地域名である。サハラ以南、熱帯雨林の北部で、西アフリカの大西洋側から白ナイル、さらにはエチオピア高地、紅海沿岸にいたる地域のこと。現在のモーリタニア、

マリ、ニジェール、チャド、スーダン（共和国）、エチオピアなどの諸国を含み政治的な地域単位ではない」とある。実際のスーダンはこのような広い範囲を表す「境界不明瞭な用語（地方名）なのである。このことを認識した上で学習者を混乱させないような、統一した教科書検定基準・地図表記が必要である。

ここで問題なのは、教科書によって呼称が統一されていない点である。それだけこの地域への関心が低いことを表しているのかも知れない。

(2) 地方名としての「スワヒリ」の課題

図24「東南アジア海洋世界」(A5-111)には、アフリカ大陸東岸に交易の結節点としてスワヒリが描かれている。スワヒリを国名や地方名と同様に表記することは疑問である。スワヒリは言語名であって現時点では国名や地方名としては一般的でないからである¹⁸⁾。

スワヒリについては図25「スワヒリ文化」(A8-56)、図26「東西アフリカのイスラム文化」(B11-110)にもみられるが、こちらはスワヒリ語の話されている範囲を表示しているという点で問題ない。ただしスワヒリについては、この地域の研究が盛んになるにつれ、(和田1977)のように将来的には地方名と同じニュアンスで使用されていく可能性がある。

5. 遅れている日本の教科書におけるアフリカ表記

アフリカは長い間「暗黒大陸」と呼ばれてきた。だが、暗黒だったのはアフリカではなく、この大陸についての知識だった¹⁹⁾。残念であるがこの指摘は正しい。

本稿では高校世界史教科書の「アフリカ記述」を地図表記の課題に限定し検討した。21世紀の情報化社会に、どれだけ教科書の記述が対応できているかは極めて疑問である。現状に対応した正確な記述が早急に必要である。これまで教科書検定といえば「語句」の表記のみが注目されてきたように思う。今後は地図表現にも注意してほしい。さらにいえば、縮尺(スケール)や方位の情報もそれらの地図には付け加えてもらいたい。

本稿で指摘した地図表記の問題点は、大部分は基本的な事項であり、高校で使用される地図帳でチェックすれば事前に防止できたはずである。いずれにせ教科書検定の際見落とされたのであり、「地図表記」が軽視されていることを示す好例である。ぜひ地図表記にも注意と関心を向けてほしい。なぜなら「地図はその国の学問文化レベルを表す」といっても過言でないからである。

筆者はこれまで、地理教育の後退・低迷とそれのもたらす弊害を指摘してきた(西岡1997)。今回は「地理教育の視点」から、歴史教育分野への

要望・要求を試みた。このことは「地理教育衰退を容認」するのではない。むしろ地理教育の重要性を周辺分野へアピールすることで「地理教育の復興・再評価」をめざしたいからである。

また、筆者は「国際理解教育はまず世界地図から」を唱えてきた(西岡1996)。しかし残念だが、現実には高校生が世界地図や地球儀にふれる機会は、極端に少なくなった。だからこそ世界史教科書において、バランスのとれた「正しい世界認識(空間認識=地理認識)」をめざした記述が一層重要になるのである。今後も根気強く、地理教育分野からの発言を続けたいと考えている。

《付記》

本稿の内容の一部は、2003年度人文地理学会大会(於：関西大学、2003年11月16日)にて口頭発表したものである。

《注》

- 1) 学習指導要領には地理A・地理Bとも目標の中で、「現代世界の地理的認識」と表記されている。文部省(2000)『高等学校学習指導要領解説・地理歴史編』文部省p.195、p.198。
- 2) 当時中曽根首相から高石文部次官に社会科解体の指示が出され、文部省(現在は文部科学省)内に「カミの声」として浸透していった。その背景には「教科書問題を考える議員連盟」による歴史科独立をめざすグループの圧力があつた。さらに歴史科独立には地理とセットにしておいた方が「歴史科エゴ」への風当たりを弱められるという考えがあつた。そして、あわよくば地理教育関係者の中から「独立」に共鳴する声が出せるのでは……、という思惑から地理歴史科は誕生した。いずれにせよ政治家と一部の学者が巧妙に役割分担・連携することで、社会科は解体させられた。これ以降地理教育は歴史教育の「補助的存在」と位置づけられ軽視されてきた。高嶋伸欣(1989)「社会科解体と新学習指導要領」、地理教育研究会編『「国際化」時代と地理教育』古今書院pp.128~141。
- 3) 白石健一郎(1995)「地理教員の採用動向」、地理40-8、pp.113~114。中学校社会科教員で地理を第一専攻した割合は10%に満たない。斉藤毅(1998)「地理教育の刷新と活性化に関する方法的一考察」

- 地理学評論71A-2、p.89。したがって社会科教員には「地理は苦手」という教員が多い。苦手意識を持った教員に教えられる授業が「おもしろくない」のは当然である。高校生の多くは中学校で「おもしろくなかった地理」「興味を持てなかった地理」を、高校で選択しながらない。「地理の内容」がおもしろくないのではなく、「教える側」に責任・課題が多いといえる。
- 4) 「ホワイトアフリカ」「ブラックアフリカ」という用語自体、皮膚の色をもとにしたものであり、地域区分の指標としては適当でない。小堀巖編(1971)『世界地誌ゼミナールV、アフリカ』大明堂p.Ⅱ。
- 5) アスワンハイダムの建設工事は旧ソ連の資金援助で1960年に着工、1970年に完成した。このダムの完成により誕生したダム湖＝人造湖がナセル湖である。田辺裕監修(1997)『世界の地理16、北アフリカ』朝倉書店pp.2292～2293。同様にこの図1には、ユーフラテス川上流(現在のトルコ)にもダム湖がみられるが、これも誤りと考えられる。
- 6) 地中海と紅海を結ぶ運河で1859年フランス人レセップスが建設に着工、10年後の1869年に完成した。
- 7) 渡辺光ほか(1974)『世界地名大辞典7、アジア・アフリカⅡ』朝倉書店p.925。
- 8) イスマイリア運河は、1860年代にスエズ運河に沿う村々に飲料水を供給するために建設された運河で、灌漑に利用されている。渡辺光ほか編(1974)『世界地名大辞典6、アジア・アフリカⅠ』朝倉書店p.103。
- 9) 森本哲郎編(1979)『NHK文化シリーズ歴史と文明・埋もれた古代都市6、アフリカ古王国の秘密』集英社pp.175～257。
- 10) 旧イギリス植民地であったナイジェリアは英語発音、旧フランス植民地であったニジェールはフランス語発音で、ともに同じニジェール川に由来した国名である。
- 11) 米山俊直(1985)『NHK市民大学講座、新・アフリカ学』NHK出版協会p.84。ピーターモーターほか著・小林章夫監訳(1992)『ピクチャーアトラスシリーズ、絵で見る世界探検地図』同胞社出版p.54～55。
- 12) 前掲9) pp.219～223。
- 13) ジョンエドモンズ編・古川奈々子訳(2000)『世界探検アトラス』ニュートンプレスpp.76～77。
- 14) ワジとはアラビア語で河谷の意味である。浮田典良編(2003)『最新地理学用語辞典(改訂版)』大明堂p.287。
- 15) 例えば日本の東方、北海道・東北沖にまで氷河があったのか?。また北極海全域が氷河に覆われていた表記には疑問が残る。同様な氷河表現に関わる地図B7-19の表記と比較検討が必要である。なおB7-19にはニュージーランド南島に氷河の表記がみられないのも問題である。
- 16) 教科書A3には、別のページpp.60～61に奴隷貿易の説明がある。
- 17) 渡辺光ほか(1974)『世界地名大辞典7、アジア・アフリカⅡ』朝倉書店p.552。
- 18) スワヒリとは、海岸を意味するアラビア語のサヘルの複数形サワーヒル sawahil に由来する。サヘルもまた広大な砂漠を海と見立てると、その南縁は海岸に相当することからそのように呼ばれる。菊池滋夫(2001)「インド洋沿岸のスワヒリ都市」、嶋田義仁ほか編(2001)『アフリカの都市的世界』世界思想社pp.142～143。
- 19) 前掲9) p.1

《文献》

- 和田洋一(1977)『スワヒリの世界にて』NHKブックス
 西岡尚也(1996)『開発教育のすすめ－南北共生時代の国際理解教育－』かもがわ出版
 西岡尚也(1997)「初等教育地理教科書類にみる第三世界(途上国地域)記述の変化－開発教育の視点から世界地誌の復興を考える－」新地理45-2
 斎藤 毅(1998)「地理教育の刷新と活性化に関する方法論的考察」地理学評論71A-2
 西岡尚也(1999)「新学習指導要領にみる地理教育軽視の方向－高校「地理歴史科」における地理を例として－」岐阜地理43
 西岡尚也(2001)「開発教育のなかの異文化理解」地理46-9